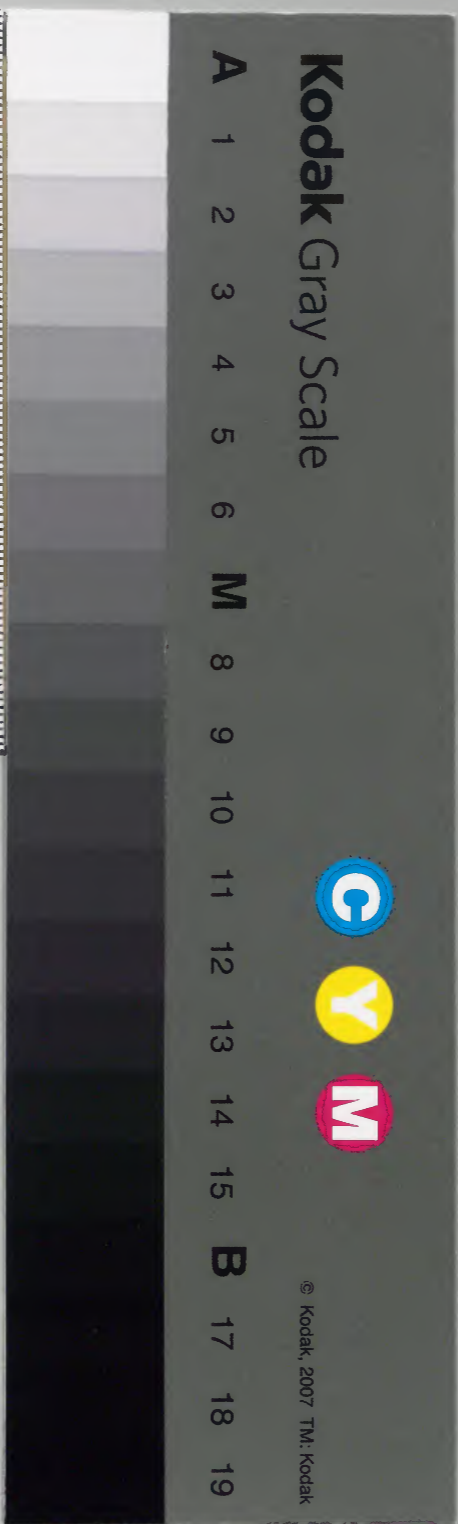


徒然草 下

内閣文庫	
番號	和 18699
冊數	2 ( 2 )
函號	特 119 4

内閣文庫	
和書	一八九九
類	二冊



淺草文庫

花ハさうらわに身をまかせたまはるる  
ものゝあはれをいひしめ  
喜ばれぬ情



咲かす縁に袖ちわさけはたし  
むけはまはるる花見  
わらわらにまやかす  
さしる事ありてま  
うかえうてはるる  
花はらわ月をさ  
さる事ありてま  
かたはるる

ら枝か乃枝ちわよ々わ々はえにや  
あふりやめり美おるもえ〜めたりりや  
お〜く運男女れ情もはえに逢ふ縁と  
りよのりいありさやとす〜うさと思ひ  
あ〜あ〜契わをりこちなりき夜成ひわ  
あ〜〜をきや井を思居わあきちり霜よ  
ひ〜を志のよ〜うとこのむじはいりり  
望月結くまるきを千里之糸まてなりめ  
〜ふよわの暖ち〜くたわ〜まらか〜うり  
ふ〜心〜さ〜う〜ま〜こ〜ゆ〜や〜う〜ま〜あ〜り

山は杉乃木は椿よみ〜うる木え百の歌  
うら〜〜られ〜家村寺うわ〜れ〜のほと  
ま〜ゆ〜あ〜れ〜ち〜雅業志〜〜〜なまの  
あ〜〜う〜る〜や〜う〜な〜ゆ〜あ〜れ〜人よ〜き〜う〜き  
〜さ〜ま〜う〜男〜に〜志〜こ〜て〜心〜あ〜ん〜友〜り〜あ  
初あ〜う〜む〜保〜ゆ〜進〜す〜て〜月〜花〜を〜だ〜さ〜り  
め〜え〜〜ら〜る〜も〜乃〜六〜其〜れ〜を〜立〜さ〜す〜も  
月花束い福やれ〜らあ〜も〜思〜つ〜ま〜う  
い〜だ〜の〜り〜う〜む〜〜〜〜〜〜〜人  
ひ〜ん〜よ〜す〜ま〜ゆ〜ま〜も〜え〜〜〜無〜す〜ゆ

ありては我さうわなわめくのみありて人よ  
さうくは流傳はりて真の連花見もと  
わらふり直りわあさめもせのまひりて  
酒乃と連奇りていふは其の又な流傳  
あり流めくわわらぬ泉もは手足さ  
ひりて言ふはわわらて流傳を  
と流つた物よなうさる事なり  
さやうえ人信登りて流傳を  
なわ流見るといふさうりて其流傳  
不測なりとておとさるるを酒乃と

物とて因基双六ありて流傳もは  
人流をさうと連はわらわらぬと  
時よをぬくまもつらやうにあらひ  
さうりて乃わらて流傳もは  
あてをさうあり流傳もは  
まわらてとありわら物とていひて  
わらわらぬまはみわら人さうと  
わらぬ只物をぬく人とひるあり  
わらの人流ゆと志けありて  
わらくすさうとわらぬあり

人乃うー後ーきあぬいさまのあーくも  
とよひうーくひわりあきみんせす  
んも形ー何定ぬく夢うをわうー  
あまうーきりーぬちあれぬ程さ乃ひて  
うひる車ーらものゆーきまう程  
うれーたあと思よすまちは角下部形と様  
うーわうもはるーをわきうーくも  
きまー小行ーあるもほまーく  
うーわうまーさくまうへはる車とも  
とらなくなまぬはる人としらうー

ゆきうー人程ぬくまわうなわて車との  
らうーさもすぬすうれたうも  
とらうーひ目代あまのけう  
ゆきうー世代たうーも思ひまう  
あれあま天流みたるうまうわんさ  
まうあまかめ機安のおとうらひ  
人形うーまうあまうあまうま  
世え人数もまのまは月うぬい  
と人う形うせあん及我力志ぬへ  
まうまわたわせ程みくまう

おぼしあるらにのふ水鏡入るわうき定を  
あけらるり志しる事すくみと  
うせまきいするまぬくせわゆりやうそ  
原守ぬり一都志申よおぼし人志ふさ海貝  
あるうらひ一日にひらわううわりの  
ならんやち都野船累さぬ野山も  
まらる敷おかふ海日けあまくとらうぬ  
日々なり一すれひはまきひさくりの  
作らえらるるほら形一わらきあも  
うらひはまきさよとよらひ思ひつけぬは

死劫たつわしりまきあるまよふか  
何れしうまきうまきなわこり一七世を  
乃らうまきわたりひな人やまきこくえん  
うらまの茂すく流くお石まきはらわい  
うらあくうらう福いとらまきん事うま  
り一こも志しる花うらあてくひとら茂  
らりぬまきう流外ま乃らまきぬまき  
まきくかまきまきうまきぬまき  
うらまきも乃らまきぬまきわたりぬ  
うらまきぬまきぬまきぬまきぬまき

家をもりす神力をもちあする世をなす  
草中此庵より都より水石をもてあうひて  
是を飯に少と思つるハ心をもつ  
きつるな山乃わく世をたぐく身きかひ  
きつるきつる人やう死な乃うめる  
いく所は降小すくめるにわ  
糸をぬき後にあひあううなわ  
或人泣みすなるをえふとらなれ  
とらあくと受しゆしとらき人  
あまのさるるまもと思しとら  
用防内侍

あまのさるるまもと思しとら  
用防内侍  
みはえ菱はしとら  
母屋のこすにあひ  
よめるより  
こととら  
はり  
かける  
よわ  
あま

おけるまの連にりるくはにふりあるを  
久我あくいつくとりすつへ勢流帳り  
あくわつくす玉も九月九日菊りり  
くくくくといくをさうぬにきくべわ  
まももあゆみきよくを枇杷の皇ち右ま  
からと終へ後少のまの長乃ちらよ萬藩  
之はたまありのまたるり侍びるをさう  
わわあめぬはあをうけつるこ弁の  
めのとのつくる返事よあやめ乃草ハ  
あわあうとも江侍後りらうー

家にあわさき木松檜松ハふ葉もり  
花はひるなふーハ金檜冬葉ははに  
乃くまををあは比う世にわかくなわ  
ゆかある吉野一志花方近れさくくみ知  
ひとへまきよう西終の重櫻ハこまう  
物ちちやうこちくちちけくちえひせ  
あわあんとく檜又すまきーわーのつき  
くるもむつー梅ハ志流書うのわ梅  
ひとくなふ、よく笑さるもりさなわなふ  
紅梅乃ちひひうた葉もあふ



そそき梅を楊よきまあひして受しきさし  
けをさきて枝に志かこほきまか心う  
ひとへ折るりまらさきそちりうるい  
とくわりうそそ系極入る中細くハナ我  
ひとへ梅をなん折ちうくえうまそりき  
系極乃屋深南むきにひまも二本侍り  
柳又わりう柳月うりはわかええ  
すつてう路津花もみちもまきわて  
うたき物わらうらうあううははまも  
本ハ物うら大なゆりう茶いもまうき

藤のきろもくおてうこ池はりち  
秋の茶の萩すくあきらううまきめ露花  
うらちうま志をんわきしりううゆりや  
まんううまそく菱菊のぼくそすあきか  
あまもいもたううすきくやうなる垣  
まらううぬすのほか波世にまきなる物  
うううまううのえ乃ううう花も思なるぬ  
なまあうあうううのわわあうかあも  
ううううううううううううううう  
真すか物なわさやうの物あううううう

身死して財ある事、智者死ねたる安なるを  
よらぬ物、くしくもきくもつて飛く  
く貴物なすくろもきん空をくあ  
おちくくむれるま、くちて我、  
えりぬく、りつ、の、く、  
ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、  
い、く、く、く、く、く、く、  
く、く、く、く、く、く、  
く、く、く、く、く、く、  
く、く、く、く、く、く、

慈田院法竟遠上人の俗性三潘り

おもしろくもあつたさ、  
人あきまわつて物、  
よみつる、く、  
く、く、く、く、  
く、く、く、く、  
く、く、く、く、  
く、く、く、く、  
く、く、く、く、  
く、く、く、く、  
く、く、く、く、  
く、く、く、く、  
く、く、く、く、  
く、く、く、く、  
く、く、く、く、  
く、く、く、く、  
く、く、く、く、  
く、く、く、く、

一云聖教は心より成ておぼゆる中一  
 事御も位持ぞんてはやくやりしきふが  
 心よりそ益もあるよ。いふ此おれはわり  
 心ありとこゆふものもよ貴一をえりよ  
 も乃ながらあるあへてえひすれおろろ一  
 なるりこえよあひて清子をたしんや  
 とひよよひもわもむら侍るひと善く  
 さいはものくあれハ志り然り一情れ  
 心より一の終らんやいとおろろ  
 子取にようあはありよこひ志るれ也

一云聖教は心より成ておぼゆる中一  
 事御も位持ぞんてはやくやりしきふが  
 心よりそ益もあるよ。いふ此おれはわり  
 心ありとこゆふものもよ貴一をえりよ  
 も乃ながらあるあへてえひすれおろろ一  
 なるりこえよあひて清子をたしんや  
 とひよよひもわもむら侍るひと善く  
 さいはものくあれハ志り然り一情れ  
 心より一の終らんやいとおろろ  
 子取にようあはありよこひ志るれ也

ついでにりーをもあわぬへまゝ子一うら  
慈愛乃たあゝていかにあはれもあはく心下り  
慈悲あわふんや孝告先而流るまゝのむ  
子もらていも親族志ハおりの志るあま  
世成すていも人おあよするすゝなる  
あつてかこーおわゆる人まよるは  
へはひるなりとあつてまゝとせ  
おひひるなりとあつてまゝとせ  
あつて思ふまゝに  
おやまへてあつてまゝとせ

ぬすむと志流へまゝ子一うら  
あまのりとあつてまゝとせ  
世人信ふ人のまゝとせ  
おこなひまゝとせ  
あつて思ふまゝに  
おやまへてあつてまゝとせ  
あつて思ふまゝに  
おやまへてあつてまゝとせ  
あつて思ふまゝに  
おやまへてあつてまゝとせ

にとやめ民をおて畏れすくわの志も  
初あさんゆりううひあふつるひお食  
よのほひなふたひのこいせん人を  
まじらぬす人といひあひ  
人お終果のちあまおかへり事  
ゆと人のうらるまきこりたてまらり  
ゆりてきしすまいりくうたもく  
らん貴族をみるおる人そあやしく  
こいあのおをわくわはきつひ一言禁も  
するまひもよの連りこのむくこりかめ

あひまうく流人志日身えおさおもあひ  
や吃おかゆ進こお大事一に権化流人も  
きくむつるひ博學れおもえらるるへんひ  
をのまたしあ西おくお人れ見きてくは  
らるるあひ

柳尾お上人みちを過おひらるに河を  
馬あしをたあしく吃いひげも  
上人立ちまわりてあおたもとや若柳園意  
人、お阿あくと唱るうやうな人れ  
馬うあまわ。たうとくおわあかりと

る給ふ此ハ存生殿は傳ふるは伏せ答ふわ  
西ハやくうきま事ハ何字本不生子より  
あふ神う神ハま結縁をも志するの如く  
實海をのこりてこふ

舟一傳身泰金船水面下壘入るは行形と  
為馬乃わある人形を能くけしし結縁を  
つひまふをひかきまもつひ思けるよ  
信教するわ落てきうくわ乃ハ甚一ぬる  
一言神話もつひ人思つわりてつひ  
おうと人形をけきまきまを挑きりして

浦文儀るをころしつハおとお海を侍起  
つひつひりあやまわつるおつひの巻  
明雲壘王相者小あひ結てその終也  
兵仗の難やあ家とつひの結縁をわ人  
まことにおねにりまひつひのなる  
わるとたつて結縁を神兵傷害乃をうま  
たつてつひまひつひのなるわあも  
かくむかひつひわつてつひの結縁を  
あやふこのまきつひあつてつひのなる  
あふあつてつひの結縁を

灸治ありし所も成ぬ事いし秘事いけし  
有とす事ちくく人のいおさるうわ  
格式おもうんいしう

四十の及ぶ人力の灸をくりして三里  
やうす神の上氣を事あり必灸けし  
鹿茸を鼻にあてしうしあひさ  
出ると鼻より入て腦をむむ心つり  
能くけしん覚ゆる人うきさかん福  
あまいよ人のまきうまうまう  
なすひえそきうかかんいし心あく

灸と考よし灸のわくし人一藝の  
なすひえのうまのまの堅固しのか  
なるうわ正名の中ふまうかそ  
うしりくももりしははまきくはき  
うしあむ人天性天骨ある事うわ  
なすまひみうわよきしうを送ま  
堪能れうあまきるうわいおよ上を  
泣よしうわきくさげ人うし  
なすひえの灸をうする事あり天下の  
上もやうしん始に不燃れやうもあり

さう下の飛躍もあわきと道がそ人たれ  
ききたかくれいんをせりてく  
取増でさし世りさしせりてく  
師結たの事し流道より海はるは  
或人は五年ふ十小なゆまたとをよさる  
さう人種とすつ命きあちまけく習へ事  
初葉のまの老人に事し其人もえわたり  
流はさうのわさるもあひあくみらり  
大かたさ流つたまわさるやうに  
あるさうさうやすうあまかす

世俗乃事ふらりさりわて生涯とく  
下愚老人なわゆるをわたり人事は  
まあひきくとむそをむしき成志りふ  
わたりありさしやむへもよわ  
望りとあくるやまんぬ事なわ  
西天寺跡静然上人よりまわ眉を流  
まこしにやとだけさかみ様とく内表へ  
まのまのまのまの西園寺田天良及  
うりとのまのまのまのまのまの  
まのまのまのまのまのまのまの



うらふ。候し。申さ。運々。わ。後。日。に。む。く。大。元  
あき。ま。の。と。光。さ。ま。か。ひ。て。毛。を。け。う。る。と  
ひ。の。さ。ま。あ。の。き。り。た。う。と。と。み。て。伏  
と。え。同。存。へ。ま。の。き。れ。た。わ。け。さ。ま。へ  
為。善。大。師。を。入。る。り。と。ま。ま。て。武。士。と。も  
う。ら。の。こ。み。て。高。は。程。へ。あ。て。り。け。さ。い  
賢。翁。の。一。條。わ。り。り。と。ま。ま。て。お。願  
う。ら。や。ま。一。世。に。あ。る。人。思。か。か。る。さ。ま  
あ。ら。ま。か。い。れ。さ。ま。の。心。を。か。か。る。さ  
は。人。京。寺。え。門。よ。あ。ま。や。と。わ。さ。ま。程。た。わ

あ。ら。ま。の。い。ま。の。の。の。何。れ。も。わ。ね。さ。ま  
も。も。ま。の。お。ち。ゆ。さ。ま。の。ち。わ。さ。ま。の。ち  
を。ま。ま。の。ち。や。う。な。る。成。り。て。か。か。る。さ  
う。ら。ひ。な。た。と。せ。も。の。ち。わ。り。も。お。ひ。る。に  
あ。ま。ら。ち。と。お。り。ひ。て。ま。の。り。わ。終。る。候。と。ま  
や。う。て。る。お。真。は。ま。て。み。よ。と。て。さ。ま。の。さ。ま  
け。り。の。さ。ま。は。さ。ま。の。さ。ま。の。さ。ま。の。さ。ま  
う。ら。ぬ。お。の。ち。ま。の。ち。の。ち。の。ち。の。ち。の。ち  
う。の。ち。の。ち。の。ち。の。ち。の。ち。の。ち。の。ち  
あ。ら。ま。の。ち。の。ち。の。ち。の。ち。の。ち。の。ち。の。ち

おのれおのれとを絶するなれとわと絶れく  
にわづらひけきけ絶れいへりれきる木とも  
皆わづらひけきけ絶れいへりれきる木とも  
世に志すりり人はいはれ機嫌を志ふべし  
心よもよもひひを志すべし心よもよもひ  
おのれおのれとを絶するなれとわと絶れく  
志ぬるるり乃と機嫌を志すべし心よもよもひ  
あしきやむりいあしきやむりいあしきやむりい  
あしきやむりいあしきやむりいあしきやむりい

あしきやむりいあしきやむりいあしきやむりい  
あしきやむりいあしきやむりいあしきやむりい  
あしきやむりいあしきやむりいあしきやむりい  
あしきやむりいあしきやむりいあしきやむりい  
あしきやむりいあしきやむりいあしきやむりい  
あしきやむりいあしきやむりいあしきやむりい  
あしきやむりいあしきやむりいあしきやむりい  
あしきやむりいあしきやむりいあしきやむりい  
あしきやむりいあしきやむりいあしきやむりい  
あしきやむりいあしきやむりいあしきやむりい  
あしきやむりいあしきやむりいあしきやむりい  
あしきやむりいあしきやむりいあしきやむりい  
あしきやむりいあしきやむりいあしきやむりい  
あしきやむりいあしきやむりいあしきやむりい  
あしきやむりいあしきやむりいあしきやむりい

おらてめくらむまはあは下らわあさう  
はりのよんふんはくそあうむする氣  
下はあうげうゆるゆくにあちなるはめく  
甚くや一生老病死乃うはひきりるり  
みこはるる色だわ四季にあをさるるまはる  
はひくはら死期いつひそをまゝは死ハ  
あふりもきこつひかひこづかぬ  
まほわ人皆死ある事なきりてまわん  
まもら色あはるるまほはくひてある  
おきあせいひくはるるあは後よるまをかく

三つてがごとくあはるるあはるるあはるる

大月乃六段いさるるへまははあ  
まもあははひの事あり字治方大はあ  
東三東教うへをさるるの裏もへあわ  
あわあわあわあわあわあわあわあわ  
あわ乃あはあはあはあはあはあはあ  
あはあはあはあはあはあはあはあは  
あはあはあはあはあはあはあはあは  
あはあはあはあはあはあはあはあは  
あはあはあはあはあはあはあはあは  
あはあはあはあはあはあはあはあは

かあつひるにこれとあるうわおと不善の  
だも少しはなれりて〜のありうきまの  
聖教に一字をみ違へ何となんか後乃又も  
尺起卒亦ありてゑ年志那をあるうむる  
本平もらつとあるよのまら此支をひらけ  
し〜ま〜りい山事い成志らんや足外  
あ〜る〜不利益なり心文よと〜いとも  
佛ありありありす〜を〜経をと〜を  
な〜に〜ふらよも善業をの〜修され  
蘇乱え心あり〜も魂床よ坐せり覚ひ〜て

禪定あるう〜し〜る〜程〜と〜ら〜二〜あり  
おあり〜うむ〜を〜修め〜四〜禮あり〜い思ひ  
志ぬ〜も信〜ふ〜う〜〜のあり〜き〜そ〜是〜我  
た〜う〜と〜む〜  
盡然〜に〜成〜す〜つ〜る〜事〜い〜く〜心〜の〜い〜ふ〜と  
或人信〜ふ〜の〜い〜ま〜は〜あ〜い〜魚〜を〜野〜を〜流〜を  
う〜こ〜ふ〜こ〜わ〜ら〜ぬ〜を〜す〜は〜ら〜う〜や〜修〜らん〜也  
中〜ゆ〜い〜り〜い〜ま〜も〜は〜あ〜い〜魚〜を〜野〜を〜流〜を  
乃〜う〜い〜て〜口〜に〜修〜ま〜い〜る〜可〜成〜す〜く〜く〜形〜也  
〜う〜修〜め〜し〜

よふむすひとりのあゝ系とむとひあきく  
たふり巻とりの貝と似ておれぬりつこ  
あふやん事形素人傳く物まみおといつ  
あやまわなわもあまひもあまひも  
門小彩照る哉うつとりのあまひもあ  
動解由小彩の二品禪門の彩かかふ  
乃さきひま見物と棧あうはもようぬ  
あやひりりわうはなとけつとけり也  
棧あひまあつるなとりのつと護摩とつと  
ひあわはつ修すか護摩はるぬとりのあわ

新法もほ乃字をすてつとわはつと濁て  
つと空清閑寺乃傍正作と建案つとり  
つと中にもあふ事乃と杉外  
花はさしわい冬玉とつとり而も十日も  
時正の後七日ともつと立春より十日も  
むかやうたのつと  
遍照寺にせうしは師池はるを日來うひ  
つとて入堂おしとらうとえとまきと戸ひら  
あけと進げ敷もあひ入ともわらるる乃ら  
まの進のつとてとつとつとつとつと

うろ志き海よりうろのむらうくくきき  
くくをなう海よりくく人よはきき  
村儀をのむくくむて入てふ海より  
天為りあくくきある中には師き  
うろふせおちあ流けき度けは師を  
とくへてにうろは廢へくくくけ  
あ流すくくくくくひよけき  
禁獄きくくにききり基後大御言別角乃  
町よな人侍き  
天衝のちれ字點うろくくく

陰陽乃とりくくお論のりあわ  
むわちくくくくくハ吉平ノ自筆  
古文れくくくくく記道徳志  
関白殿あわ點くくくをたわ  
世ハ人あいあくく時きくくも悉止する  
くくくくくくくくくくくく  
むわくくくく益の談うろ世界お浮説人  
是非自他のくくく失おく侍すくく  
くくくくくくの時くくくくく  
かちんくくくくく

あはれまの人乃が此人よまゝにさうわしたの  
人先あまに初て力をたぐふ又本寺の心を  
さあれぬる顯密の僧すつてわが俗に  
あつすて人よまゝにゆるみらるる  
人あはれまをさるるをさるる。また  
日に寄佛をほくわてさるる。金銀  
珠がたかたわいとおの堂をさるると  
ゆるに似さわその、まゝにまらるる  
あまゝ人や人漢命はまらるるわい  
かよわ消さると雪はるる。わらに

あまゝまらるる事喜ばかり  
一たにさるる人あまゝをさるる  
のさるるあまゝをさるる。まらるる  
かよるるに思はるる。物たさるる  
思はるる事つて。乃事あれとまらるる  
わらゆるなわらるる。乃らるる。まらるる  
わらるる。あまゝをさるる。まらるる  
まらるる。あまゝをさるる。まらるる  
あまゝをさるる。まらるる。まらるる  
あまゝをさるる。まらるる。まらるる  
あまゝをさるる。まらるる。まらるる

たつひたわ人とししては善よかるといふ  
物もあつたりさるを極と他よまきさる  
こと能あゆはた大なる失たお果れたりた  
よひも才藝をすくれたまふも七光禮を  
参りて人もまふりたり人の家人を  
たふひにも藝のつてくもいひもとも  
ぬかすりこりくのとるありはくしてて  
い建をわするもまふもみし人も  
よひけられわきつひともまふくといふ  
此邊心なち一なるもまふもいひぬる

人々うつろあきつてふそ誰と志はあふ  
あつ流所ははみにみうりはてはに  
物小わらう事あり  
年老する人れ一事すれはあ文はる  
此人れは誰よりいひんあといひるは  
光えりうりるもあつるははくあひ  
さしはあはるははくすれはるに思ふきい  
一生の事いひるははくあつるははく  
人れ介は志はるははくあひはあわあ  
おわらるゝ志ありあつるははくあひ



あつしはいさりの志才の事ありぬうり  
きつええをのつらあやまわもあめ  
きつらもちきまんと志くすにあひひ  
なれまじといは志あるりしは覚ぬ  
まゝしきぬこりきありかはねあ  
かきぬつくとあぬ人信ひひきす  
まもあひひおのひおろきつぬ  
いとわのり  
何事かの志きぬ事後淡路記内代  
まをまひはちわけのちき程すわの詞

あつし人おし侍りに建礼門院記右系大支  
ける御殿記此位の後みうらす  
事記しつと世記しきもありり  
なまかもとりまわ  
きつら事あつて人志くわねあ  
事記わ用きて行たわとも事  
とくゆりあつとあつる心とむ  
人とむしひし道詞はあつと  
心もあつしあつたわとあつす  
たういゆたあ益わといとり

ふらんをわが心けきりあふん  
折心宋人其のたはひのそんおあり心  
あつりまのりと思ひん人涙つましくも  
の志しりい心静のゆもふりんそ  
法眼はあつるにん院籍りあを寺眼  
誰もあるへ事事なわさるもくわきに  
人乃まこ乃もろよ物法しとまらわぬる  
心静り又よも久し心静りさき  
あつるわつひをさるる心静り  
貝とわりの人の我まらあるをなまきて

よそ成んわつて人若神若のきひきの  
下つて目とくつるまゝああるまら  
おほつたぬふくたあつひとち銀のま  
わわわとるるあつひとちきりわ  
おほつたあつひとちわわわわわ  
こもんますまのりつとつとつとつ  
むつひなわつをまわつてはつとつ  
あつひの我るもつとつとつとつ  
ひつとつとつとつとつとつとつ  
必あつるまら外もむきてあつとつ

思ふくめとほたぐりくはくし清獻の  
こころまほしかりけりし昔程をとら  
なり神地との世をたしうんたしう  
侍る人目をほくたまはるるけり  
しとくみよるなまはるる遠國か  
るるむくむくむくむくむくむく  
濕にうて病成神靈よりうるる  
人たつちと醫書よりうるる  
まんなか人え愁成るる恵をほく  
道成たぐりしはそ化とくあはるる

事成志くさゆなり高れゆま  
行きしむくささるる徳を  
まのありき  
わく時ハ血氣をらるるあま  
うらまの徳欲なりけり  
くさけやすき事玉成るる  
似るる義無成ありて  
是をすく言所成も  
さうわくしとあはるる  
うらまのむとあはるる

色もあきあきげにうてりそをききよく  
して百毎乃ちまきあやまら命をうへあつる  
たけりしゆりしりしりてはるまきまきく  
ひきしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
うう流しきしてなうき世わくわともなふ  
まをあやまらういわく時思志わきせ  
老ぬる人の精神をうへありくを流るり  
うて感しりうくともあなりしりしりしり  
まのうくしりしりしりしりしりしりしりしり  
ふきり身なたすもて慈みく人たあきしり

なしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
すよまきしりしりしりしりしりしりしりしり  
老ふかきしりしりしりしりしりしりしりしり  
小野小町、事しきりしりしりしりしりしりしり  
おとろるへくしりしりしりしりしりしりしりしり  
あきしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
あはきしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
大師を承和川をしりしりしりしりしりしりしりしり  
小町、きりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
なれおしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

小樽小樽きだ大樽のほけりひぬ小樽  
わ流とあるさゆり大小つき小をすける  
こりわ流小きり那り人事むかふる中  
たき多のしぬりわ氣味あり羨ハ那  
是愛の大事那さ一うひるをさしてこ流  
あう流さく人思は流はわきりす  
さ人何事さうひるかまんと流な流  
人さうさうも一こきだ流う流  
とさうんや  
世よ心えぬ事此わ流又たわともある

こもさばまの酒流すもめえ志ぬ流まを  
さぬと無と流るるのうな流ゆへも  
心えぬのむ人流りわいもささげよ  
眉さひうり人免流さうりてすをん  
まけんとすう流とくへひきとん  
ひくわ小流まを流ま流りま人も  
うらまらに粗人さうりてまこりま  
息災ある人小月乃ある天事流病者と  
なわくお後も志さすたわ流さすひり  
へ事日形とげあきまうりわぬ

あらるほきくしきくくくくくくくくくくくく  
あまのひきしきくくくくくくくくくくくく  
あまのひきしきくくくくくくくくくくくく  
あまのひきしきくくくくくくくくくくくく  
あまのひきしきくくくくくくくくくくくく  
あまのひきしきくくくくくくくくくくくく  
あまのひきしきくくくくくくくくくくくく  
あまのひきしきくくくくくくくくくくくく  
あまのひきしきくくくくくくくくくくくく  
あまのひきしきくくくくくくくくくくくく

あまのひきしきくくくくくくくくくくくく  
あまのひきしきくくくくくくくくくくくく  
あまのひきしきくくくくくくくくくくくく  
あまのひきしきくくくくくくくくくくくく  
あまのひきしきくくくくくくくくくくくく  
あまのひきしきくくくくくくくくくくくく  
あまのひきしきくくくくくくくくくくくく  
あまのひきしきくくくくくくくくくくくく  
あまのひきしきくくくくくくくくくくくく  
あまのひきしきくくくくくくくくくくくく  
あまのひきしきくくくくくくくくくくくく

と一光うるは師り一おき終てくらを  
きこたれたるをかくぬきえめのあてしつ連  
すちわらえ真一一人さんうもま一  
ま一あゆみ我もいん一受る一  
うしつうしつひきうせ或ハ酔あき  
志もさしま乃人ハ乃りあひつぎうひて  
あきま一くわう流一ちちりま一  
心うきつり乃くあわてをていぬるさぬ  
物ともな一りて縁うわねち馬車うわ  
むらてあやまら一に物うも乃うぬきつ

大流とよろわひゆきてえほひちちい  
志るれともむきしえもいしぬ事とも  
志ちり一一年老か雲霞うけうは師  
こころしつれく城をきんておぐぬる  
ついでつくと流うきうういんかりゆ  
ふの家事一も一てもうの世もは世も  
益あるハ貴わさあうはいりぬき舞  
い世にやあやまらわわと財とうたあひ  
痛をまりを百薬志長うはしめあえ病ハ  
酒うりまうまら一れうまわするよとひん

醉する人より過りしうき事も思ひて  
なぐりる後世其人の智慧をうらみ  
善根をやく事火をぬくして悪業を  
多量に積む戒をゆるわす地獄に墮つ  
酒をゆるわす人の罪をゆる人五百  
も形も生るをゆるゆる佛の説給ふ  
かくうらましとおぼ物な事をも  
捨つる折もあつる月形を言ふ  
花ももとうき心乃もに物言し  
悪業の事なき無業の事なきわ

ほしきくなふ日思ひの外に友乃入来て  
あつるをこゝろにわもゆるる事なきむ  
あつるゆるるぬあつるわ内蔵の事なきわ  
あつる物みきわゆるる事なきむ  
あつるゆるるかたきわゆるる事なきむ  
あつる火もゆるる物なきわゆるる事なきむ  
あつるゆるるわゆるる事なきむ  
あつるゆるるわゆるる事なきむ  
あつるゆるるわゆるる事なきむ  
あつるゆるるわゆるる事なきむ  
あつるゆるるわゆるる事なきむ  
あつるゆるるわゆるる事なきむ



すうー乃とふもいせりーよき人志  
とわちきうひまひらうへすふあーゆと  
のつまらせらるるつれーちるはるまかりま  
人形上戸まきひーしーとま神ぬるふ  
うけーさーいんくと江戸にたーしーを罪  
ゆるさるるの形を解らるるの連てあさひ  
まゝるるにをあるーのひまあきたるるー  
まよひててお連るるがな形うらわら  
まゝるるにわーおもきあつひいさきむら  
ひきま流ひてまゝるるういとうわひるるれ

うー流をげおひとあかうまきみのほ  
にかりとけきう  
黒戸ハ小松深みしと位りーはらせれて  
あーしー人ふにりーまー可まをな  
事ーしきおれーをわす神れりそつて  
いとあまを路ひきるる方形のみりま本に  
すくをいせに黒戸とりしと  
徳愈の中書主として流鞠あわゆるにあめ  
少りて及ぶまゝと庭乃りりりさわげと  
ゆーきんとゆは有けはたはるる隠は入る

鋸乃らつと車よつとてわたりたりたり  
けさけ一庭よき。禮して泣き立ちわたりひ  
なつちをわたりたりとてあふ人用道有るごと  
人感あつたりわたりは事ありあるもの  
わたりわたりとてわたりる吉田中一節言  
ありますあふたりよりいやはあふたりと  
乃らつとひたりたりはつたりたりわたり  
乃らつとわたりひたりる鋸乃らつとわたり  
いともやうなりたりは庭の儀をなす人  
わりりますあふたりとてあふたりはあふたり

或ふえさつとひとも月信乃らつと神樂を  
なり人よつとつるごとく鋸をなす人  
りらつとつるあふたりとてあふたりは  
女房法中に別殿に行幸は晝夜を  
法劍よりいふあふたりとてあふたりは  
たり心ありたりわたりとてあふたりは  
なつちをわたりたりとてあふたりは  
入粟忍ゆ門を眼上人一切殺戮を  
あふたりはあふたりとてあふたりは  
あふたりはあふたりとてあふたりは

那蘭陀寺は号して流ひに包み中流に  
那蘭陀寺は大河のむきありて江師之説  
とてソひ流く之を西域傳法頭傳と  
ふも凡そソひ更ふ亦見あり江師之説あり  
才学もふし、ソひ流く人むあつたなり  
唐王を西明寺に小ひき勿論をらりて  
寺をちやうの西月をらりて寺をらりて  
法言院より神泉苑へ移りて焼め家うつり  
法成院の池に、とてをやすし神泉苑に  
池成のふたなり

少少くは雪うんえのあゆまなり  
よもゆき少るひに、ふも似ては粉雪也  
つたたまき出雪をふらきあやまわて  
だんも能くはりのあやまきあまきと  
うらふは、此あ家物きり中きり、よわ  
つひき家事、よも羽院をきり、  
たりにま、く雪流する、ゆき、く、ゆき  
あふ、う、澄波にすけか日記、書り  
四條大納之澄親、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき  
供佛り、ま、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

あやー地物まるるやうありし人代  
 事代をすて天淵を鯉とりの魚の  
 事代とあんなはうあてさげえ  
 何事事りありんあゆの志うか  
 まゆぬりりともさるる  
 人行くういふ角度きり人よ馬をな  
 耳をきわてその志ういふ志う  
 信じていへん人代かゆきをぬら  
 とりちり人よわをらやいあひ  
 うるいは芝居とらあり様お禁

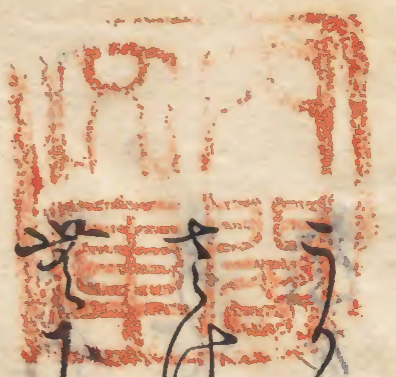
相換の時形れ母ハ松下お福屋  
 さをいし中さう事ありら  
 うるあうわさうし乃や  
 する小刀しきわまりは  
 ことおとせうとの城子介義景  
 事いめりてはらるる捨りわ  
 男よとせらんさやう乃事  
 母のゆせしきしきと男互り  
 ことまきわゆるしあま  
 うれらをか義景と事とらわ

りふりいふやすらふまじりふれも  
又らうくやせあきめて尸を種をれは  
左も及いさづくしちわうんと思へ  
くふりわらわきとわくてあるはきなわ  
物はやせれうる雨をうわを世程し  
もあひの事うせわき人ふみあしりせて  
あはつせんうあなわとりききくうい  
らうくくわわ世とわむれは儉物を  
もとくひ女性なれは聖人れわうくわ  
天下をならむ人の子うくわくきける

まじりいふ人あきわきるう  
城陸奥を泰盛が友たれきるのわあわ  
馬をひきかきせきるはあし城をわへ  
しききをしわわわいふをわい見  
ゆきめるるやとく勤政をきるきわ  
又是れ乃てあまきよけあてあまき  
あまきよけあまきよけあまきよけ  
あまきをきるきるあまきよけあま  
あまきよけあまきよけあまきよけ  
あまきよけあまきよけあまきよけ  
あまきよけあまきよけあまきよけ  
あまきよけあまきよけあまきよけ  
あまきよけあまきよけあまきよけ  
あまきよけあまきよけあまきよけ  
あまきよけあまきよけあまきよけ

志願中世乃るるを刺るをばまわすて  
行ふ時とてあるはゆきふれ志願中一  
く回を鞠に重なるやふき事やあると  
見てもある流るゆきふるありて馬を  
たすふもひは舟を忘るるを馬繋ふ  
れうらう秘流え事なわとり奇  
美路為之人たひし徳をたるとし  
堪徳乃非求徳人なりなり可なり  
まきふるなりだゆきみくはく  
うらういせぬとひしよ自由なるもの

ひしよのゆきふるを流能不作乃る  
むかひのえ振舞心はゆきひしよ流る  
ゆきふる流流るなりなりなりなり  
なりなりなりなりなりなりなりなり  
あるもの子流は師なりなりなりなり  
因果を程を志し流流るなりなり  
なりなりなりなりなりなりなりなり  
まに流流師なりなりなりなりなり  
流るなりなりなりなりなりなりなり  
流るなりなりなりなりなりなりなり



さらんおのりくまらまを後なるいこく後  
 うらぬやうに思ひくわ次は佛事其後  
 其のれとすくむる事ある人に法師若  
 其下に能形素を檀那すまきましく思ひ  
 とくまあまをいし事申をなすひくわ二つ  
 わきやしくさうひひさ入け進はつと  
 なる志くくた深くくくくなをきる様  
 説法なるお八事陳形する海らわすあ  
 あり法師乃之ものあは世間人あつて  
 けりあわわの事ほくち徳る人にけけり

ちよこく天なるたふも能く能くつま  
 業回ともき人といまひくくあま  
 事す心くくをたふく世を乃とら  
 おひえまらまをくわけくま  
 あらわくく目ま前の事は乃くま  
 月日たまされはくくあす事なる  
 した方の老ぬ終ふのよまをく  
 ねのひやくに身よむひくわ  
 ちわあまをく齡なるひくわ  
 坂をくく輪はくくにたはく

さきほどおぼはけがらむの光あくるあかり  
しる人 事此中にては （？） まるごとく （？）  
おりの （？） こと （？） 成業 （？） 定る  
まかき思ひし （？） 事 （？） けむり  
一日 （？） ち （？） こと （？） あり （？）  
き （？） 中 （？） 事 （？） 益 （？） ま （？） ん  
る （？） 外 （？） 事 （？） けむり  
天 （？） 事 （？） けむり （？）  
ま （？） 事 （？） けむり （？）  
なる （？） 事 （？） けむり （？）

ゆ （？） 事 （？） けむり （？）  
天 （？） 事 （？） けむり （？）  
す （？） 事 （？） けむり （？）  
捨 （？） 事 （？） けむり （？）  
ま （？） 事 （？） けむり （？）  
成 （？） 事 （？） けむり （？）  
石 （？） 事 （？） けむり （？）  
と （？） 事 （？） けむり （？）  
う （？） 事 （？） けむり （？）  
東 （？） 事 （？） けむり （？）



西山よりゆきそくおきまきるへき事哉  
思ふこゝは門よりぬえりてあまひゆく  
つぎなわちゆくまてきりつぎぬれい事をい  
えりひそん日哉さくぬるりおれ西山え  
事一いふまらりて又いふおひたぐりて  
おれいふあま一町乃悔意すありち一坐お  
悔意となぬれ終をたうらう一一事一哉  
うあひひおきんとおもりて他乃事一の  
やうそなむらうむらうい人はあきんらわ  
をむらうらういあま事一にいんひてい

一乃大事成るる人院あまのけりけり  
中よりあるのまきかえひくまきまらうお志  
すいまらういふまらうあわわこのつれ登  
けりてけりてふらりたわとわらわらふを  
登道は師なれ座よけきるるまきりて雨は  
うわきるよんのかきやあふりておん  
かの為れりなるひはらうのぬり重のり  
らういまらうんといひきふとあまらわよ  
物さりてありやうてふまらう人院ひひ  
ふまらう下れいふまらうおらうおらふ

人前命ハ雨のちまよふもあつものり  
我もあまの聖もうせふハ為さるる人ぞん  
てしむりてくひはくはなまひ持するわ  
中流くえうるもゆくりあわくへう  
むかひせぬもあはすありちあわく  
論語とつふみも侍ぢるるおひくを  
りつりくはりひはるやひに一大り  
母縁をくわりへあわきるる  
いひまをそまのたあきんおのりあ  
うりきあおれすきれくししまり入る

さりわあてたのめぬ人け事わたのこころ  
亦乃事ハうりひて思ひあぬ道りわ  
あまひぬあつりりわはる事  
こゝあてやひるる事ハおのり  
日々に過るはあひし思つるうはひ  
アまおうちもあくおとも一とあま  
又まのなわりあまのあまのあひ  
ゆくりもあまのあまのあまのあひ  
事ハあまのあまのあまのあまのあひ  
心けあまのあまのあまのあまのあひ

高子とてしつものいそをちののもりうま  
物なまじしほも獨すまうくあてきくよう  
あはれめくけ進雅りーの聲はうちぬとも  
みづうなな女をらわすつてあひほなま  
やほまの無下に心をさうわきあひりさ  
かちことなな事れま女はうーと思ひ  
あはれえまううひのめさめといやし  
まーしつりし様うま女あはれうの男と  
らううくーとあり佛とまのわあさめ  
たさんあささうわあさうとあはれめ

まーしつ乃うち我まこあひほきめ  
女い口行し子れとてきてーし  
あひーとあ心うーおとこあくたわは  
たふちうて年らりたるあわさまのあま  
まーあさまーしつりな女用ちとも  
うひうんまいよと心はまはくまうあ  
あはれつあの中空よようあうりうあ  
とまきくうひすまんうーし月短ても  
たしぬあしひたなまあまうあま  
とまわぬなまさんあつーしわぬ

東小入るものくちへりし人いと  
くらげの海津のものくきりあわさ  
しもゆるるのこころの事ひるは  
こころきまをすけふはあまも有なる  
物なきしりふちあやりなふさうさく  
ふさうし人ほそくたしゆるかかつけ  
ふさうさく物いじたる聲もくくして  
すたる月さあるこころの事ひも  
ものきもくくゆるるのときひりてさ  
きしりていとあふるるの事おら交る

まのゆるる人おきよけなるさきしり  
ふさうしりりあふらあふらとくさ  
くらげの海津のものくきりあわさ  
しもゆるるのこころの事ひるは  
こころきまをすけふはあまも有なる  
物なきしりふちあやりなふさうさく  
ふさうし人ほそくたしゆるかかつけ  
すたる月さあるこころの事ひも  
ものきもくくゆるるのときひりてさ  
きしりていとあふるるの事おら交る

東小入るものくちへりし人いと  
くらげの海津のものくきりあわさ  
しもゆるるのこころの事ひるは  
こころきまをすけふはあまも有なる  
物なきしりふちあやりなふさうさく  
ふさうし人ほそくたしゆるかかつけ  
すたる月さあるこころの事ひも  
ものきもくくゆるるのときひりてさ  
きしりていとあふるるの事おら交る

くもす人此人をうりてそ智代志行わ  
思人更にあつるつらひにほりあす人思  
こひはあつるつらひとくつらみあるは  
あつる人此に執着を離るなる我を  
あつる、智にをりしはこほりよるつら  
たえつらみ我れを人のしつらるをみ  
あつるすれつらと思人あつる大あ  
あやまわあつるしつらのは師暗院乃禮師  
たつらつらつらつらつらつらつらつら  
あつるあつるつらつらつらつらつら

物まにあつるつらつらつらつらつら  
連人思人あつる眼をすつらつらつら  
あつるつらつらつらつらつらつらつら  
あつるあつるつらつらつらつらつら  
あつるあつるつらつらつらつらつら  
あつるあつるつらつらつらつらつら  
あつるあつるつらつらつらつらつら  
あつるあつるつらつらつらつらつら  
あつるあつるつらつらつらつらつら  
あつるあつるつらつらつらつらつら  
あつるあつるつらつらつらつらつら  
あつるあつるつらつらつらつらつら  
あつるあつるつらつらつらつらつら  
あつるあつるつらつらつらつらつら  
あつるあつるつらつらつらつらつら

業—ぬふか人けり又備—  
むかし—も人あり—  
あんと—やとぬる人もあり又さきく—  
推—心えぬる—  
—らうあつまわく—ぬる—  
—らぬ人ありみす—  
—ふり思わく—  
—あや—む人あり又—  
—わらとぬら—  
又—ぬえ—

むかし—ぬふか人けり又備—  
むかし—も人あり—  
あんと—やとぬる人もあり又さきく—  
推—心えぬる—  
—らうあつまわく—ぬる—  
—らぬ人ありみす—  
—ふり思わく—  
—あや—む人あり又—  
—わらとぬら—  
又—ぬえ—

らん、こも、但あやう乃を、り、わ、え  
佛に、ま、え、を、あ、す、く、り、つ、つ、ハ、夢、は、あ、く、り  
或人、又、我、か、つ、て、ま、と、を、わ、け、る、ふ、小、神、小  
お、か、く、ち、ま、う、る、人、ま、は、く、わ、れ、地、蔵、を  
田、の、中、に、お、り、な、り、ひ、く、り、て、移、人、う、あ、り  
あ、く、ひ、を、わ、か、え、く、り、く、り、家、に、お、り、移、り、た、ら  
男、二、三、人、お、き、え、く、り、に、お、り、け、り、ま、り、え  
う、の、人、は、ま、り、て、い、ま、あ、り、又、我、因、大、に、あ  
ま、り、く、り、お、り、く、り、る、為、に、お、り、く、り、く、り、る  
時、に、お、り、ま、り、や、ん、事、な、き、人、ま、り、お、り、く、り、わ

東大寺に神興東寺の如宮よわぬ壺を時  
源氏のまゝ集り神ににけ殿木がま  
きま我をりれけをまゆらお國社致しあ  
路を驛うく侍へり人といきまきけし  
侍男お振舞に共はれ家り志る事と能  
たうわ答給事わまき及、侍り神ににけ  
あ乃お國小山お我らて西宮之説をり  
志りれありまれ眷属に悪鬼悪神を  
敬し神社をてくりにき起をまふ八寺理  
あわやう侍り神にまきり

説寺に傳ふも少くありて定願を女孺に  
しりしり迎奉式よりしりす人たりす  
きつまわらるる公人を通考する  
揚名介にりきりし揚名目せりしものし  
あり政事要略よあり  
後川を行宣は早かりし唐玉の呂元  
國形を律法音かし和國を單律の國と  
呂元音形しりしと音  
吳竹は架わらる河竹八葉は河下河津に  
ありきり河竹仁壽殿にありしりしりて

極く進へるは吳竹なり

退元下紫芝亭勢ありあり下紫田あり  
退元形あり

十月と神事月と云て神事よと云くは  
一書ありしりしりか物ありしりしりも  
尺のひたくりしり月読社のまわらり  
ゆかりしりしりありしりこの月と流つた  
神よりしり神意へありしりわらりしり  
ありしりしり説ありしりしりしりしり  
こゝに怒月とすしりしりしりの例なり



十月読社於り香を例も折り一但勢くハ  
不吉儀例 かわ

勅勅は下ノ勅かゝる作ははまをてて  
志もる人ありまよ山惚天ノ世帯  
きりりきと来冬子束乃天神ノ勅  
けりる勅に趣きのみ明神とハも勅  
けりる神なる者皆も折負た  
勅をそ取らぬ神めま人かハ  
しり絶へ後今儀世の封成はるに  
かわりわ能人志りてまうり  
可ハ

拵器ふとてゆひつゝ儀也拵器乃様も  
よする作法も少きハわきま人志りる人  
あり

比叡山に天師勸清文起清とハ事ハ  
慈惠傍心書ハハ銘を添うり起清文と  
り中法曹ハハ法ハハハハハハハ  
聖代ハハハ起清文ハハハハハハハ  
政は形来を近代ハハハハハハハハ  
又法令ハハハ火に穢我ハハハハハハ  
けりるあり

徳大寺右大臣殿推非遠使の別商以て  
中門より使廳乃揮定をこかり終る程  
官人章兼、牛を多引て廳迄もちへ入て  
大狸乃産けたまゆりえう人ぬ乃知りて  
も違ふらぬとて臥たわらわをりき、恠異  
那らざる半成陰陽師のともくはつす  
へきり、各中なるを父乃お國まで送て  
うに分別なり、脚あまを以てくへ  
乃わらざる人、懸弱は官人なり、か仕能  
襪半成とるへきやう、今も半を成

ぬ、小入り、一、其跡をわきまらるる  
え、まよふわあつて、凶なり、なるわきまらるる  
なんあや、一、之、成りてあや、一、まきる、時、ハ  
あや、一、ま、へ、わ、え、や、う、と、い、わ  
龜山殿だ、一、被、人、一、地、と、ひ、く、ま、る、に  
天、な、ふ、ら、ら、お、け、敷、も、ま、り、ひ、く、わ、あ、け、ま、わ  
た、る、塚、あ、わ、ら、わ、は、は、お、け、ま、わ、と、い、ひ、く  
こ、し、う、お、り、一、と、い、け、ま、り、ひ、く、あ、け、ま、る、と  
物、あ、り、ま、る、に、あ、る、く、よ、わ、は、地、を、ま、め  
こ、し、う、お、り、一、と、い、け、ま、り、ひ、く、あ、け、ま、る、と

みか人Pさまをいふ小世をく一人五玉  
まらん宮皇居をまきまん小何乃く  
まらん宮の素鬼神ハヨウヨウヨウヨウ  
ともむつひのたか皆かりすつと  
Pさま神くわげまはるをまつて蛇を  
大井河ふたつてくわ文よ崇あわわ  
強みなるの紐とゆふりりのまもらわ  
このまもらへて二すち中うわわあは  
しつとまのまのまのまのまのまの  
このまのまのまのまのまのまのまの  
まのまのまのまのまのまのまのまの

弘慶傍心とて我ておかせと事なりと終ハ  
こみくあやうま事りかむいれまらし  
うるりーくわくくくくくくくくく  
うんくわりまもへわおれま事なま  
まきむくくくくくくくくくくくく  
あうれ事し志のる人ふなる人持ま  
人お田を論すかあのうくくくまけ  
移くまにう渡田をうわてとまにま人  
はりりけのまをけくくくく田をま  
くわまをけくくくくくくくくくく

つふかくりとらひくまはだうるものとも  
そにたてても刈ハ事なうりりあふ道とも  
僻事らんうへまうの先あまははくくさか  
うみまらんうりりしむ家うとりわおと  
おろりりわあやわ  
うつこきハ春のもりなりとりわひひて  
うある事もさうらうの志のさる物あり  
或言書の中よりうこきぬく則招魂志  
法をききこなりは決事ありハ礼ハ露うり  
万葉集乃長あよ霞うらうあきまははかなと

清くけくわ鶴鳥も喚子をばう火をまに  
かよひてきこゆ  
あ乃事ハ兵をよのまへうりりしを海なる  
人々うりりもの成このまゆへふうん  
いりぬるハありソキうりひはわををれむ  
うりりしニリキぬえわらぬ財たかりと  
新むくくハ時のもふうハなひやひ  
文あわらぐた乃む庵うりり孔子も時ふ  
あしハ徳あわとてたのむくくハ都回も  
不幸なるわきを思籠をむめものむ庵うりり

珠とうらな事すすやうな奴志るるわ  
え教へてうひうむきまへ事行全  
人信志教のたのむへていふあひま  
物とも教へてうひ位ある事すう  
男とも人ともこのまきまは是ある可  
どううひ事なる時ちうう思ひたあひ  
けきまありうひあは連けまきうひ  
せう時ハひけえう心よりらぬ事  
すうきまへてきひ一教時ハもの  
さうひあううひてやあはなるうへ

やううらな事すすやうな奴志るるわ  
え教へてうひうむきまへ事行全  
人信志教のたのむへていふあひま  
物とも教へてうひ位ある事すう  
男とも人ともこのまきまは是ある可  
どううひ事なる時ちうう思ひたあひ  
けきまありうひあは連けまきうひ  
せう時ハひけえう心よりらぬ事  
すうきまへてきひ一教時ハもの  
さうひあううひてやあはなるうへ

うははアアきれらうらひおらぬやうに  
心えく炭をほむるや形を八幡を西幸に  
侍集れん浄衣残きをきりて炭をきりて  
けいふあゆみ識の人白貴物をきりては  
火着成むらぬるらうらうらうらうら  
想夫恋定りし樂や母おとこよふる所は  
名はあはれおのわお府蓮女おえりて  
うら晋の王侯をけりておふらすを  
うへておとこ一町を樂をうらそよわはは  
蓮舟をうらう廻忽し廻船なる廻船なる

えひすはありきつ國あわて夷漢の依りて  
及ふ事わてをのまの國を樂と愛せり也  
率直叫ねる光輝なるやうにわらわら  
西明寺なるあるよひえ万よよらる事  
ありよやうにわらわらわらわらわら  
あくととらうらわらわらわらわら  
車窓よりけりてわらわらわらわらわら  
こらやうにわらわらわらわらわらわら  
あつらわらわらわらわらわらわらわら  
たわらわらわらわらわらわらわらわら

りてしつてあり酒をひとわたりて人  
きりくつてけし庄中つるなわきりかより  
ある世にけしむるまわぬかんとわぬへき  
物もあるとむしはくまをもあむかむと  
あわしつていせりてきりてしむくは  
もとりて縁にたひ雨乃棚をこつてけし  
みりけすうてけしきりて見おしこむう  
りてめええきりてぬかりてけし  
たわなんてけしけしけしけしけしけし  
無りてけしけしけしけしけしけしけし

りてしつてあり酒をひとわたりて人

最明寺入る勢り思召社系度次り足利  
左る入る乃本へまわ使然後けしりて  
立りて袂よりくるにありてまふけし  
よりくる様一献よりあらありて二献よえひ  
三献いりいりありありやとぬを座すは  
幸と夫婿隆井情心あるりてけし人  
望きりてけしわたりて年ころにたまり  
足利乃ちり物いりありけしりて  
けしりてけしりてけしりてけしりて

三十前より、女房様は小袖にて、うき世に  
後は、内より、きききわその時みうる人  
ちりくききききききききききききき  
或大福長者乃いりく人きききききき  
ききききききききききききききき  
まうききききききききききききき  
乃ききききききききききききき  
すききききききききききききき  
ききききききききききききき  
おききききききききききききき

事なるは、是れ先づ用心なるは、次は、事此  
用を、かききききききききききき  
つげきききききききききききき  
とんきききききききききききき  
ききききききききききききき  
かきききききききききききき  
もきききききききききききき  
うきききききききききききき  
我きききききききききききき  
きききききききききききき





癰疽を也む者水ふあひてふ乃一の  
ちんちんわハやあさしんちんあさしん  
つりてハ多富もく西あし宛竟ハ理即よ  
ひりて天欲み其欲よ似たわ  
まろひば人よくひつて物也揚川殿ま  
とひりおめあしをまつてよよくり  
仁和寺まて和布寺まあまをり下は脚小  
狐三といかゝるまてしひりまけま度刀を  
あきてし終とあきく百狐二ひきをまけく  
ひりハけきこけぬ二いよけぬは脚は

あまの所くし終あしこしゆんちんちんわ  
四東黄門命まけて云龍秋ハたよとわ  
了はやん事あき者ちんちん先はきとわて云  
短道おつてわきりめや荒涼たるし脚は  
くこ端のふの穴ハ極つてし終とあき  
ゆるりてひりよし終あしちんちんわ  
千の穴ハ東洞ふの穴ハ下無洞也と向よ  
腰絶洞をうてたわと雙洞次小鼻種洞は  
をきそふ乃穴黄種洞也其次ハ響鏡洞と  
をきて中は穴盤法調中とよとのあしよ

神仙調ありぬうりー問にみか一律を  
ぬしめる小五志穴乃と正の可よ調子成  
ゆゑのいそちも問をとるるのいそ  
ぬいそ本不快形をさすれは穴と吹割を  
かゝるひ乃くのけあへぬ問へれよあり  
あきうる人ううーとす神曾おいあわ  
濺子真あわ吹連後生とたふるるとし  
ゆり那ち吃付き他はよ景度り中付一  
望に志うへおほをえりらうれをう吹  
りわちち笛の吹たううりまおらうそ

うつちうへいそゆく物あ連穴に  
口傳りうへは性骨成とりて心成り  
こいお穴乃のよ小貴うひとんり  
乃くせうりもきうむうひあ  
うけは心傳る穴もかようり以上  
心傳るをもあすあしん呂律けものり  
うありさかけいとほとるなわ器けあ  
あしひとり  
何れもあはしあうりあはし  
天王寺え舞樂乃とけうちあはし

天皇寺を修人於中修し高る乃樂み  
圖を志しハありてその縁思ふて  
とく乃知わゆる一ありわらすれたわ  
故ハ太子ハ川時乃圖のまに侍をたうせ  
と乃心り修る六時堂のまに於鐘をか  
そを黄鐘調志りあり也冬暑小志るひて  
あわさるわらハ事故小二月涅槃會より  
聖靈會より乃中一乃を指南とハ秘法  
事也此一調子とりらて少くもこの事をも  
とく乃人ゆかたわ此中きん鐘の聲中

黄鐘調ありし是事考乃調子祇園精舎に  
無考後儀考形ハ西周寺ハ鐘黄鐘調あり  
いふゆへハ一とてありたハハハハハハ  
けきともりありありを委園とあり  
えりハハハハハハハハハハハハハハハハ  
ハ黄鐘調あり  
建治弘安乃りあるまわりの日ハ見  
つを地ハハハハハハハハハハハハハハハハ  
る或はハハハハハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

敵の心ぬとソひてわうりーいーつてよ  
ス及びゆーあとも無あわてまうる心ら  
うーううゆーいーと老るる志ともえ  
とはわわわわゆるちあめ此いけけあ  
とー或送て過差しうかかになわて  
と海津にまのき物をわわく付てたたの  
袖を人よもいせえううわかこをた  
もいひソまつまうるーむあわたまう  
みうるーいーいーいーいーいー

竹岩に系取居東二條院へまゆり神へわ

うるに之夫の返善うはなるも事一り勝利  
わな又ととつていさか結げしは光明言  
葵園下地羅五とすう被らわさる成身子  
うまかくハ中孫うるえと心にもさる事  
さうゆきーとけなと中結りぬうと  
くれをわの宗おれまきこようアさま  
うわゆまこもまさーと穉名を返福に  
ゆーいー巨益あるつーかどける段支残  
見及りゆい何りーみんうまうとかきう  
とソを結りーいーいーいーいーいー

お強はうーりあるに海をくし高き院羅左  
と及つるなわらう尸をさきか

勢えりわいのもの童名うら君なる鶴哉  
ういねきる取より尸の僻事也

陰陽師有宗入る、まらうらわ乃わわて  
たはまうをまらわーりまらうー入て

け庭おらうらうよひあまうと凌うく  
あるうらぬことなわをまらうも乃は

うらうこと我はらむわうみち一物て  
あふまらけにはらわおんをうきめ付ま

まらうにすうー地をもちうらうー

をらんこい、やをたわーうわらうお

薬種なう、れうんをうらう

多入助、うけるら通無入る薬の手に中に

真の事、ともをえうひていう漢師吃

ソひる女よとてまらきうわき海島

あ千のあうまきをさせ烏帽子とひき入

うわはまらまひやうソひくは師

むとり志流りといひけるは、藝をばわ

是向拍子お概元也佛祓に本縁哉うら



六時終續はは強上人乃弟子安樂といひ  
く僧徒をありて造つ物よきわ  
そ後を泰川善觀房とて一僧ありてせを  
さう先て夢明よかせり一念に念佛の  
寂初也後後縁院志代よりすまわ  
法事一證むおあしく善觀房よりめりや  
千本に釋迦念佛を又永忘るる如輪上人  
是とて一りてし事あり  
うき細工をすくしうき刀をほしうき  
うし妙觀り刀いしくたくり

ふ束由長くはもけ物もくわ若大細て殿  
くくく通侍一に殿上人ともくろとま  
善をもちけるふみすまうけてるる物  
あわたうと見えさくま一狐人乃やうに  
ほ井のえくく乃うきく流をあら狐より  
とよまきてまらひよけよくわ末練狐  
まけうくくくゆるより  
うのく別當入るはきう好意庵了考なる  
あつ人のゆとく一き程より  
たわしきまきをみか人別當入るは庵了と



見たりを思へばさすらうらいた人も  
いふくただめくひふるを別當入るる  
人うく此位百は此鯉をきり付まじり  
か青のへきふあひまけてゆくんく  
きく神を家つらんくはきくく真  
けりて人とも思ひか家吃ある人山乃  
ち汲入道殿よわくわくさきたわけ度  
あやうきるくまの連はよおうのさく  
おかゆりなわきわぬく身人あはれん  
きりんせいはいりんはなれりわらん

何條百は此鯉をきりんうらうら  
くりたりくおれり人と人流かまわ  
けりるいとおく天く振舞て舞あは  
らわも無あててやすくながまきわ  
ふ事ありま此人え響極めともけい  
にり青やうにらわあうまきこと  
よふ事てく事とあててわおたる  
あやう一人物とさうさうるもけい  
あはれり終れさすまきんといひたる  
まじり心所なるわむよし

おみねんこおりの勝負のまけりさう  
こまほげなま〜ふかむう〜

すつて人の無智が能ある〜奇ものなるわ  
あやうぼ子のみあまなとあ〜うぬ、  
父おあ〜て人と物りあ〜史書乃文を  
ひきだり〜とけき〜  
ま者はあ〜とあ〜ひとも受〜  
又ある人えもと〜ひえは師は物済を  
き〜ん〜て懸懸成り〜せうにあらぬ  
ひらむら〜り〜は〜わてほげ〜

う〜ある男に中〜  
見ぬる〜するま〜ひさ〜若柄ありやたあ  
〜ま〜れ済めをた〜  
ひ〜ふ〜う〜は師の懸懸をゆたあ  
ま〜りぬ〜とちらぬ〜心え〜  
ま〜あ〜り〜り〜わき〜と力え〜  
ひ〜の本とあ〜ひ〜よう〜ぬお〜  
あ〜人〜被〜し〜人〜す〜  
事〜う〜思〜わ〜みゆ〜也〜あ〜つ〜  
と〜あ〜〜〜お〜も〜〜な〜こ〜も〜

まことありて人よちのしうやく  
こゝ樂するなるらんふは志し男女  
光お見えさぬ人うよけぬるも  
わくくならし人思ふところ  
わすれしこく世ひほつるも  
流つものこゝあはれぬる  
見えざる事たし人をあ  
すかあり  
人お物残とひるにきりも  
あわ乃きんじんたに

まことありて人よちのしうやく  
こゝ樂するなるらんふは志し男女  
光お見えさぬ人うよけぬるも  
わくくならし人思ふところ  
わすれしこく世ひほつるも  
流つものこゝあはれぬる  
見えざる事たし人をあ  
すかあり  
人お物残とひるにきりも  
あわ乃きんじんたに

しやめるこゝろなまむのつゝきこもるは  
あつらもあましにむらつるねやうよ  
つぎ居わゆるんや〜るる貴事りい  
かやうに事〜にむらなまぬ人かゝ事也  
ぬ〜あるむらむす〜るな人あ〜るは  
ま〜に入らる〜ある〜な見ぬ  
たのしみ〜に互入瓶〜るやうに  
物も人けよせ〜る〜えりかよ  
つらす〜にたまあ〜る〜るぬ  
〜らもあ〜る〜物うらみあ〜るは

さ〜らぬ貴あよ〜る〜るを  
うつるあ〜るよ〜るあ〜る  
う〜る〜る〜る〜るぬをりり  
あ〜る〜る〜る〜るぬに  
ま〜ら〜る〜る〜るぬを  
うやあ〜る〜る〜るぬを  
むらみ〜る〜る〜るぬを  
ま〜ら〜る〜る〜るぬを  
母波よ〜る〜る〜るぬを  
う〜ら〜る〜る〜るぬを

おもしろくもや志す所ある秋はあはれ  
聖海上人の流りも人あまきさきりひて  
ひきひきお雲杉のこいにいひらひめき  
きんきんきんきんきんきんきんきんきん  
おろそくゆくと信たうとわはあなは  
獅子こまひぬえむきそうと流さあよ  
うらこわはきん上人のうらと感して  
おれうとやあは獅子きんうらやうと  
うらとあはきんあんと流さあよ  
いよ殿原殊勝の事と流さあよとあす也

お下なわあはに各あやとまきとに  
他ふとあはわはの流と小きんれと  
りよよ上人の流とわとあはきん  
ものきりぬきかたきと流さあよひて  
あは社に獅子のこいにいひらひめき  
なとひあは事につらんちと取らとまき  
ひつねけきとあは小伏きとあはきん  
よのひとあはきんきんきんきんきん  
きんきんきんきんきんきんきんきん  
上人の流さあよと流さあよと

わおいゝこゝろすゆるりのみだりありき  
とこありき物にふるハ夢みや巻物おこは  
とてさぬよまきこ木儀ありひよりわら  
ひひらとととととゆひつくるすくも  
だてさまにまきふる等とあるはうと  
三條右大臣殿おれせしれき勅解由小路に  
宗光能書け人々まわふもだてさぬよ  
まらるるころりあひひとこさまに  
すくくれ侍哉

法師身近友り自潜少く七ヶ宗とくり

この事より馬籠さるるころりなまき事た也  
えおためしと思ひて自潜遠事七あり  
一人あまの侍事て花見ありきし  
完勝光院遠遊とくとの馬代も  
志むるよとくく一なるを本より物あり  
うだりててあつし志りしみるハと  
立とまわらるに又馬をソすともむるは  
馬代ひきとありてある人江五志中に  
うらひ入そのことあけあやまらるる  
とも成人の感し

一 為代のまゝ坊より——ま——く——ろ  
万里小路敷の赤ありは橋川大御の敷  
程儀の——形——流——う——へ——よりあわて  
まのわたり——！ 論語結四五六五巻を  
とわひのけ給いてたぐひまの赤も  
む——きまおあげうりあ——を——むじと  
いふ文成の流さ——様——さ——り——あ——り——て  
川本城の流すまはしり——かき様ぬ也  
形もひまみ——と様——い——と——く——むじり  
形もや様——く——む——九——え——え——り——く——結

祿小侍也。下たり——い——あ——あ——う——様——い——と——く  
もてまのせ給さかかとの事、見と  
つ——の事あはし——お人まのさ——り——え  
事、我もさ——く——自讃——たる、たわ  
後、多の院乃川敷、袖と袂、一青の  
ら——！ あり——わ——あ——ん——や——と——定家様  
さ——の——お——あ——れ——る——り——  
秋、野を系れたり、さ——あ——す——ま  
か——い——ま——く——袖——見——ゆ——ん——と——は——  
何事、さ——あ——ぬ——る——ま——あ——り——と——は——さ——る——事——也

時よあつて平身誠實終はれたる眞知也  
了運なりわなまことくくくまのりまれ  
ゆかたわ九条お阿伊通公え教懐おも  
ことある事なき題目をももく衆のせえ  
自潛きく積たわ

一 考在光院法つき鐘法親ハ在兼つ法  
系形の上行廣教長法書——心わこよ  
う法さき人とせ——小在りお入る  
かの草——まらりつてくみを得——に  
花托名よ久延をこれぞ聲一面置り

きこゆとつう句は全陽唐韻とこゆるに  
百里あやまわかとつり——まうくち  
みせさくまわびるまのまのま名也とく  
筆業大孔中とへソひやりさるにあやまわ  
付く皇教のとおかたふへ——六返事  
付わま教のむつうながへま入るりり  
教歩乃心りおわつるあ

教行な茂ふ志人数ち四五形り  
鐘四五歩不幾なりたくとくまきこ  
けるあつたうわ



一人あまたとよりあひて三塔巡礼乃事  
 侍下に横川志孝の堂乃より龍善院と  
 へける少き額あわ依程行成おあひ  
 へうへひあていあまの決きひて  
 こわと堂僧とくく一と行成  
 あくばうらうきあへ依程おこ  
 お貴あへうへひあひたりうへ  
 臺所より虫を巢とへいあせげあふる  
 うきりきりうへひてをあくへ  
 の成位署あ字本号きうへり

無少入

一 那園陀寺より及眼ひて談義と  
 心災とを事をわす神てこまや  
 結呪のひて成化あふむれ  
 法わの乃内よわくまわつひ  
 くれそつみく感侍ま

一 賢助僧とつとあひて加持香水  
 み侍つまこくあわつ僧  
 久わえ侍つ陣えあまを僧  
 法師とむとつてあま

があらさまある大荒おちくしてえもあ  
ありひとひいしていひきりて  
いそりてあれわのうけもあて  
おしをいりしりていひり入て  
屋うそくしていそぬ

一 二月十日月あつき夜くらけ  
をかひるにまうてくうていり入て  
ひとわりかあうくかきりていり  
さしに像をかぬきひる。自ひ人  
解なかりわを入ていそまぬくま

まひひなもしうはるりりりいん  
あーい思てすり乃きうるにねぬよわて  
おあーさまあれいそらぬそのちある  
あふりまはるうきぬ屋乃ういり  
いりりていりていりていり人  
おりてあわいりていりていり  
いそあんあわいりていりていり  
あそまはる人なるいりていり  
たるに市ていりていりていり  
いそやいぬらあそいりていり

かひあやうりんの東田はわびと四よりわ  
人流四流——走りてさうし〜ぬ女房成  
はくわさう〜さう〜ぬてのん〜い  
〜〜葉おと〜わん物うそ〜様あわて  
〜せ真あん〜さ〜わぬき〜さう

四月十八日九月十三日…葉宿がわは有  
清明ふるおよむさもてあふ〜良夜と  
志のあは〜〜あまのん〜めあふさ〜  
〜〜ぬえ山ももる人志け〜んにわわ  
あ〜通〜ん心えさ〜う〜浅〜ひ長〜思〜

あ〜く乃高〜〜〜事とわわ〜あわ  
〜〜〜ゆ〜〜〜ひ〜〜にひ〜人  
〜ん〜ま〜わ〜〜世にあわ  
わら女のもけ形素老は師あや〜乃  
あま人形と〜ま〜〜〜  
さ〜あ水〜形〜人〜  
心〜あ〜ま〜ひ形〜〜被  
志〜ぬ人〜あ〜人〜あ〜かさよ  
何事〜さ〜う〜ら〜〜と〜あ〜い〜ん  
年月は〜〜さ〜も〜け〜〜山形〜

あひしうりんよりけしきぬことの業  
もともあつめすへてまにけ人けしわ  
まうあひしうんころ心けしなたこと  
むかふるへしうあなうんしつげくも  
まかろりみよくとしただけなん  
男をかくあやしき力乃まにあつめを  
しうろよかきんやり電人もあつめをとり  
きしけりうかひむしひわつらんもつけ  
まろしとむれあんでくよりあひ  
めしうあむめあつめふりうりしきあの

むかふる月にたぐすみきりしけ露  
まきいしん至明けうもわのあつめ  
まのりうつくもあつらん人しそろ  
とけすまうんあはし  
もら月けまうなあつめきりし  
けさひやうてしげぬろとくあぬ人  
一夜は中よさうりるまあみぬや  
あ人病けけりるもけけるひまなうし  
死期すくよあしきまともひま病  
急あし死しむりむりうあつめ

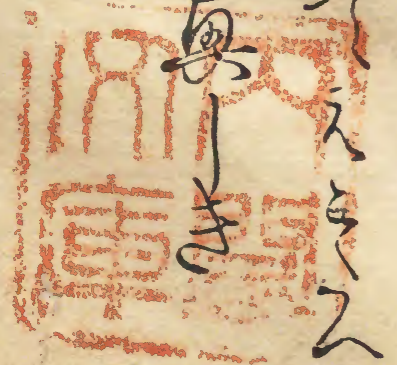
平生乃念ふなほひて生か中よ行かく志  
こも我脚一て乃らまろ小を佛とんと  
おの小福小痛をうきて死門よ乃らむむ時  
正教一事も七歳まひりういぬくて  
年月能悔息を悔てこのふひかーさら  
かやわて今我まふとせよ教を日に絶て  
け事一か乃りまこここの脚一とんと  
教をたこすうめ空屋をくりぬき度  
よれよもあふひとわみこてまをぬ  
いだらひ乃らうあうりほるりまら

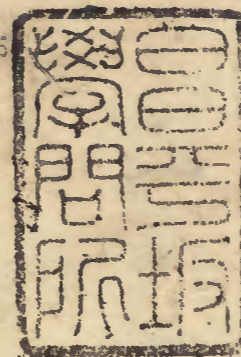
今く学まひよまこく一に教を脚一て後  
いまあわて及にむの一人と教に教行く  
つらひ如幻能生乃中よ何ゆとわふまん  
すて正教皆あ相わ正教心よきこつは  
高心迷乱ひと念入一事をもあすつらひ  
垂に美事なれ下一と道小ひ一時さしり  
あく可作なきて心身なうとまらつらわ  
と一あへ小遠近よけつらうと事一  
ひも人り一苦樂のつあなわ樂とつらハ  
とつら花の事なわと積成りしる事

やむ可なり樂欲すかきま一まは若うわ  
名に二種ありけしと文藝とのかまき也  
二つありて欲之は味形より法律の移り  
に於て三つありけしと終顔倒れ悲しむ  
たしむるうこころはわつしあわむま  
さしんまは志し

ハリーあり一奉父も問ていりく佛ハ  
いある物より佛人とし父りいりく  
佛も人儀なりとす形りとも人  
何とて佛は成伏成現成又佛は

とていよわてあるなわとてふも  
とていよわてあるなわとてふも  
又若う執も又さきの佛をへにあり  
成現形りと又何をへへめ伏する  
第一の佛はいつの佛より伏するとも  
又空よりやなりきんちよりわきりん  
いじてわつしあつしあつしあつし  
たしむるは説人よわつて





文化乙亥

